

教育長だより

鹿児島県三島村教育委員会
教育長 室之園晃徳



1958年生まれ。鹿児島大
学教育学部卒業後、鹿児島
県の教員として県内の小学校、
鹿児島市教育委主任指導
主事、大島教育事務所長、
鹿児島市立田上小学校長を
経て現職。全国一離島の学
校数が多い鹿児島県で十年
間離島教育に従事し、鹿児
島県小学校長会長も務めた。

海外の離島の話ですが、「通信環境が悪くオンライン授業を受けられない小学2年の孫のため、祖父が電波の届く丘の中腹に木を活用した勉強スペースをつくった。」という記事を見付けました。「孫のためなら」という見出しの小さな記事に思わず顔がほころびます。同時に「オンライン授業は通信環境とスマホさえあれば世界中どこでも可能なのだ」ということを改めて思い知らされたような気がしました。実際、文科省の遠隔教育システム実証研究の委託を受けて実践を積み重ねている我が三島村も、ICTのハード面が特に充実しているわけではありません。Wi-Fi環境とパソコン、タブレット端末などの機器があるだけです。最低限の環境さえ整っていれば、無料で便利なWeb会議ツールを使って、シンプルにオンライン授業をすることができます。何事もこの「シンプル」ということが、継続して実践していくための重要なポイントだと思います。かつては大型の専用機器が必要でコストも高く、使用場所も限定されているというイメージが強く残っている古い頭には、「え、これだけ？」と拍子抜けてしまいそうです。

さて、問題はこれをいかに活用するかです。村の学校では、右の表に分類されている内容には全て取り組んでいます。始めは単発的・イベント的に行っていったこれらの実践を、日常的な実践に進化させる、つまり点を線にする作業は、思った以上に骨が折れる作業でした。

日常的な実践を実現するには、学校の校時表をそろえ、時間割をそろえ、授業の進度をそろえていくことが必要です。イベント的な場合は、スポットを絞って日程や時間を何とか調整するのですが、年間を通してとなると面倒な作業を省略しなければ「シンプル」＝「継続」というわけにはいきません。各学校にはそれぞれの学校文化があり、各行事は地域の伝統や実態を考慮して組まれています。一律にそろえることには先生方もかなり抵抗があったようです。しかし、苦労して何かを創り上げていく作業は、人の心に火をつけ、苦しみが喜びへと変化していく作業もあります。手始めに取り組んだ数学と英語では、年間の8割～9割の遠隔合同授業を実現しました。また離島の小規模校では、免許外教科を複数持たざるを得ない現状がありますが、他の学校に専門の教師がいることでその負担解消に効果を發揮しています。さらに、教師相互の指導法のスキルアップや子どもたちの学力向上にも手応えがあり、研究の推進に弾みが出てきています。

「アナログの時代はよかった」とか言ってる場合ではありません。「AIに仕事を奪われる」という話も聞こえてきます。これから未来を生きる子どもたちはコンピュータを使いこなさなければ生きてはいけないので。点を線につなぎ、線を面に広げ、そしてデジタル時代を真に生き抜く人間力が求められています。

合同授業型	遠隔交流学習
	遠隔合同授業
教師支援型	ALTとつないだ遠隔学習
	専門家とつないだ遠隔学習
教科充実型	免許外教科を支援する遠隔授業
その他	教科充実型の遠隔授業
	遠隔会議・遠隔研修・研究授業等

〈遠隔教育の類型・分類〉